いたずら好きな太陽

国際学部地域文化研究センター准教授
井上　昭洋　*Akihiro Inoue*

ハワイの民話を読む

ハワイの言葉と文化の保存や復元に大きな足跡を残したメアリー・カヴェナ・プクイ。ハワイ語辞書の編纂や伝統文化についての解説はもとより、ハワイ研究においてネイティブの共同研究者として彼女の果たした役割はあまりに大きい。幼少の頃は母方の祖父母に育てられ、ハワイ文化の多くの知識を身につけた彼女は、15歳頃よりハワイの民話や格言を収集し始める。1920年代から30年代にかけて出版された全3巻のハワイ民話集は、文化の伝達者としての彼女の最初の成果であった。

私がその民話集の存在を初めて知ったのは、留学中に足繁く通っていたハワイ大学のハミルトン図書館のハワイ・パシフィック・コレクションにおいてである。収められている民話の多くは、見開きの左側にハワイ語のテキスト、右側に英語の対訳が載せられていたので、ハワイ語学習には格好の教材だった。帯出は禁じられていたので図書館のコピー機でコピーを取り、ハワイ語の授業の課題として辞書を片手に読み込んだり、ハワイ語音読の練習を兼ねて読み流したりした。その中にどうしても忘れられない物語が一つあるので、その抄訳を紹介したい。タイトルは、“カラーコロヘ（Kalākolohe）”、日本語に訳せば「いたずら好きな太陽」である。

カラーコロヘは、ハワイ島のカウー地域では有名なカフナであった。彼は人を呪い殺すカフナではなく、病気を治し、雲のサインを読み取るカフナであった。太陽は彼の崇める神の一つであり、ホノカーネ渓谷には彼の一族が代々儀式を司るヘイアウがあった。

ハッチンソンは、その近隣にサトウキビ農園を持つ砂糖プランテーション会社の社長であった。カウー地域のハワイ人の間では、彼はパラポイ（乾いたポイ）と呼ばれていた。というのも、彼の首は日焼けのために皮が捲れ上がり、乾いてひび割れたポイ（タロイモのペースト）のようだったからである。

カラーコロヘの呪力を聞き知ったハッチンソンは、日照りの度に彼に雨乞いを頼んでは雨を降らしてもらっていた。ハッチンソンの度重なる要求に嫌気がさしたカラーコロヘは、わざと長雨を降らせることもあったが、請われると雨を止めた。乾期が続くと、雨乞いを頼まれて雨を降らす。雨が止まないと雨を止めるよう頼まれる。そのようなことが長く続いた。

ある日、再びハッチンソンに雨乞いを頼まれたカラーコロヘはとうとう腹を立てて、「そんなに雨が欲しいなら、貴方の銃で太陽の尻を撃ち抜いたらどうだ！」と言い放ち、ハッチンソンの要求を断った。その夜、彼は、自分の神を侮辱する言葉を吐いたために余命幾ばくもなくなったことを夢の中で知らされる。彼は家族に自分は神を侮辱する言葉を使ったので間もなく死ぬことを告げ、翌日息を引き取った。

その後、ホノカーネのヘイアウは取り壊されたが、この渓谷では人気がないのに祈祷する声や話し声が聞こえることがある。この渓谷では、ククイ、ノニ・アップル、マンゴ、オレンジ、ハイビスカス、ヤシ、パンダナス、イチジクなど多くの樹木が生い茂っていた。昔から厳しいタブーがこれらの樹木を守ってきたが、カラーコロヘの死後、人々はこの渓谷で好きなだけ欲しい果物を取るようになった。

文化の邂逅と変容

民話として収録されたこの物語は、ハワイ島のカウー地域でおそらく1870年代に起こったであろう出来事を振り返って語られたものだ。この物語に登場する白人の農園主と会社は実在した。ハワイ砂糖農園主協会の記録によると、ハッチンソン砂糖プランテーション会社は、アレキサンダー・ハッチンソンによって1868年に設立された。同社のプランテーションは灌漑設備を持たなかったので、カウー地域の不安定な降雨に依存しなければならず、頻発する干ばつに随分と苦しめられたという。

この物語は、具体的な固有名詞が出てくるため、つい最近に起こったことのように思われる。しかし、誤って神を侮辱したがために命を落とすという話は、遙か昔の出来事のようでもある。時代の遠近法が狂ってしまったかのような印象を与える物語、神話的世界がつい最近まで存在していたことを教えてくれる物語というのが私の受けた第一印象だった。

しかし何よりも私が衝撃を受けたのは、この民話がハワイ人と白人（ハオレ）との出会いを、そしてその後のハワイ社会の変容を、あまりにも象徴的に語っているように思えたからだ。お人好しと言って良いくらい親切なハワイ人と利益追求のためには利用できるものは何でも利用する白人。白人の度重なる懇願に付き合いきれなくなり、思わず吐いた罵りの中に自分の神を侮辱する文句が入っていたがために自らを滅ぼしてしまうハワイ人。一つの言葉や一つの行為の選択が、人の人生のみならず、社会全体を決定的に変容させてしまう歴史の綾。西洋文明との接触直後にハワイ文化が様々な局面で辿ったであろう道筋をこの物語は集約しているように思えてならない。

白人農園主が望んだものは恵みの雨であってカフナの死ではなかったはずだ。雨乞いを頼みに行く時には、鶏の一羽やワインの一本でも神への捧げ物として用意したであろう。彼は、自分の要求がカフナの死を、さらにはその後に続く人々の生活の変容や自然環境の変化をもたらすことを、予想だにしなかったに違いない。白人が意図していなかったにも関わらず、西洋文明と出会ったがためにごく短期間に内側から変容していく島社会の姿は、白人が意図せずに持ち込んだ伝染病で瞬く間に人口を減らしていった島民の姿と重なって見える。

このような見方は「致命的な衝撃」説と同様のノスタルジックな歴史観、または島文化の脆弱性をことさらに強調した静態的な文化観として批判されるかもしれない。しかし、この物語の意義が、史実を語っているかどうかにではなく、それが人々の間で語り継がれていたという事実にあると考えるなら、そのような批判は少し的を外していると言えるだろう。カラーコロヘの物語は、外部からのほんの小さな働きによって文化変容の歯車が大きな音を立てて回り出した時代を生きたハワイ人の集合的な記憶が語り継がれたものなのである。

ところで、ハワイが西洋と接触し急激に変容していった時代、非業の死を遂げたのはカフナだけではなかった。ハワイ砂糖農園主協会の記録によれば、ハッチンソンは、1879年、脱走した2人の中国人農園労働者の追跡中に命を落としたという。その後、農園は人手に渡り、社名に彼の名が冠されることになったのだった。